

各 TOEIC-IP 総得点層におけるリスニングスコアとリーディングスコアの平均点の点数差に関する報告

有坂夏菜子*¹

A Report on the Score Differences according to the 3 Total-score Groups of TOEIC-IP Tests between the Average Scores of the Listening Test and those of the Reading Test

Kanako ARISAKA

In this paper I first divide the group of total scores of TOEIC-IP tests that students at Oyama Kosen gained from 2011 to 2014 into three, that is, high score group, middle score group, and low score group. Then, in each score group I calculate a score difference between the average score of the Listening Test and that of the Reading Test. It is found that the score difference of the middle score group is always larger than those of the other two groups, which I claim suggests that students who are thought to belong to the middle score class show more and faster improvement in their listening skills than in their reading skills.

KEYWORDS: TOEIC, institutional program (IP), Listening Test, Reading Test, average scores, score difference

1. まえがき

本稿は、平成 26 年に小山高専英語科教員が作成した論文「GTEC 及び TOEIC-IP の結果に見る、過去 3 年間の小山高専生の平均点と受験者数の推移」に触発され、作成したものである¹⁾。

これまで TOEIC 指導を行ってきた、「TOEIC で高得点を取るためには Reading の点数を上げなくてはならない」ということや、「TOEIC の点数を上げるために学生が少し勉強すると、まず Listening の点数が上がる」ということには気づいていた。しかし、それはしっかりとした数値上の

裏付けがあるものではなかった。今回、小山高専で平成 23 年度から平成 26 年度までに実施された TOEIC の「団体特別受験制度（以下 IP テスト）」の試験成績データを使用し、年度ごとに Total スコアを「450 点以上」、「450 点未満から 300 点まで」、「300 点未満」の三層に分け、上記の経験上の認識が妥当であるかどうかを検証するために調査を行った。

ここで TOEIC について簡単に説明しておきたい。TOEIC とは Test of English for International Communication の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界基準のテストであり、各自の英語能力のレベルを客観的に数

*1 一般科 (Dept. of General Education), E-mail: yagishita@oyama-ct.ac.jp

字で表すものである。平成26年度の実績によれば、高専生は、「公開テスト」で8,690名（平成25年度は7,674名）が受験しているのに対し、IPテストでは15,780名（平成25年度は16,364名）が受験している^{2),3)}。

IPテストには、試験期日、試験場所が自由に決められ、申し込みは実施団体担当者がまとめて行い、受験料が安い一方、公式の認定書(Official Score Certificate)は発行されず、受験者個人には「スコアレポート」で点数を知らされるという特徴がある。それに対し公開テストは、決まった会場で定期的に行われ、申し込みは個人で行うことになっている⁴⁾。

2. 結果予測と検証方法

「まえがき」でも述べたように、本稿を作成した動機は「TOEICで高得点を取るためには、Readingの点数を上げなくてはならない」ということや、「TOEICの点数を上げるために学生が少し勉強すると、まずListeningの点数が上がる」という、経験に基づいて得た知識の検証である。

その経験的知識に基づくと、今回の調査の結果として、以下のa, b二点が予測される。

- (1) a. 英語基礎力がある、またはIPテストに対する準備勉強を常に心がけていると著者が考える学生のListeningスコアとReadingスコアはどちらも伸びるため、そのスコア差は英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生のListeningとReadingスコアの差と同程度になりやすい。
- b. IPテストに対する準備勉強を少しはしている、または勉強を始めたと考えられる学生の場合、Listeningスコアから伸びる傾向がある。したがってそのような学生のListeningスコアとReadingスコアの差は、英語基礎力がある、またはIPテストに対する準備勉強を常に心がけていると考えられる学生のスコア差より大きくなる。また同様に、英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生のスコア差より大きくなる。

(1)を検証するためのデータであるが、小山高専

で平成23年度から平成26年度までに実施されたIPテストの試験成績データを使用した。そしてそのデータのうちTotalスコアに着目し、年度ごとのTotalスコアを、(i)高得点層「450点以上」、(ii)中得点層「450点未満から300点まで」、(iii)低得点層「300点未満」に分類した。その上で次のように考えた：

- (i) 高得点層に入ると考えられるのは、英語基礎力がある、またはIPテストに対する準備勉強を心がけていると考えられる学生が取る得点である。
- (ii) 中得点層に入ると考えられるのは、IPテストに対する準備勉強を少しはしている、または勉強を始めたと考えられる学生が取る得点である。
- (iii) 低得点層に入ると考えられるのは、英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生が取る得点である。

そして得点層ごとにListeningスコアとReadingスコアの平均点を出してみた。

小山高専における平成23年度から平成26年度までのIPテストの実施実績は、以下の通りである。希望者対象のIPテストを年2回、それぞれ6月末か7月初旬と12月中旬に実施した。一方、成績評価の一環として、IPテストを前期定期試験中に「応用英語1」受講生対象に1回と、後期定期試験中に「英語演習II」と「応用英語2」の受講生対象として1回で、計2回行った¹⁾。

次節で本校のIPテストの受験者人数として示す数字は、データを機械的にまとめたものである。例えば、ある一人の学生が本校でIPテストを三回受験した場合、三人がIPテストを受験したとして算出したものである。そしてListeningスコアとReadingスコア、Totalスコアの平均点として示す数字についても、上記と同様なやり方で機械的に算出した。

まず、(1)の予測が正しいかどうかを検証するために、本稿では前提として「英語力は全ての技能(skill)がバランス良く成り立って構成されているはずであり、常にバランス良く向上していくはずである。したがってListening力を測定するテストのスコアとReading力を測定するテストのスコアのそれぞれがTotalスコアに占める割合は、学生がどの程度の英語力を持っているか、または学生がどのくらい準備勉強をしたかにかかわらず、全ての得点層においてほぼ一定となるものである」というように考えた。

次節で示すが、ListeningスコアとReadingスコ

アの平均点を比較した場合、個人的なばらつきはあるものの、基本的にはどの得点層においても Listening スコアの平均点の方が Reading スコアの平均点より必ず点数が高くなるという結果が出ている。

もし先の前提となる考え方が正しければ、上記三つのどの得点層においても、IP テストの Listening スコアの平均点と Reading スコアの平均点との点数差は、それほど変わらないはずである。したがって得点層によって Listening スコアと Reading スコアの平均点の差に違いがあれば、学生の英語基礎力の違いによるか、もしくは準備勉強の量の違いにより、Listening 力を測定するテストのスコアと Reading 力を測定するテストのスコアのそれぞれが Total スコアに占める割合が変わってくるということになる。このことは、前提となる考え方が正しくないということになる。

そしてもし「450 点未満から 300 点まで」の中得点層に入る学生の Listening スコアの平均点と Reading スコアの平均点の点数差が、「450 点以上」の高得点層と「300 点未満」の低得点層にそれぞれ入る学生の点数差より大きいならば、(1)が正しいと判断できよう。

次節において、平成 23 年度から平成 26 年度までの IP テストの試験成績データを、前述のように年度ごとに三層に分け、それぞれの得点層において算出された Listening スコアの平均点と Reading スコアの平均点の差を求め、そこから読み取れる特徴をあげていくことにする。

3. 調査と検証

本節ではまず、平成 23 年度から平成 26 年度までの IP テスト受験者数の推移を、「450 点以上」の高得点層と「450 点未満から 300 点まで」の中得点層と「300 点未満」の低得点層の三層に分け、表 1 に示した。

表 1 各年度の得点層別受験者数の推移

	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度
～450	40	43	46	39
449～300	238	182	115	149
299～	66	63	66	75
計	344	288	227	263

総受験者数は減少傾向にあるが、高得点層と低得点層の人数はほぼ変わらないといえよう。

ここで各年度における留学生並びにバイリンガル日本人学生受験者の総数（延べ人数）について触れておくことにする。平成 23 年度は 8 名、平成 24 年度は 6 名、平成 25 年度は 3 名、平成 26 年度は 6 名である。

次に、上記各年度 IP テストの得点層別の Listening スコアの平均点と Reading スコアの平均点、さらにそれぞれの平均点の点数差を一覧表にしたものを以下に示す。

表 2 平成 23 年度の各得点層の Listening、Reading の平均点と、その点数差

H23年度	Listening	Reading	L-R
～450	327.8	273.5	54.3
449～300	218	145.6	72.4
299～	160.8	98.5	62.3

表 3 平成 24 年度の各得点層の Listening、Reading の平均点と、その点数差

H24年度	Listening	Reading	L-R
～450	316.3	252	64.3
449～300	220.8	141.2	79.6
299～	158	103.1	54.9

表 4 平成 25 年度の各得点層の Listening、Reading の平均点と、その点数差

H25年度	Listening	Reading	L-R
～450	311.5	249.2	62.3
449～300	222.6	136.5	86.1
299～	157.4	103	54.4

表 5 平成 26 年度の各得点層の Listening、Reading の平均点と、その点数差

H26年度	Listening	Reading	L-R
～450	334.6	247.6	87
449～300	226.5	133.8	92.7
299～	160.6	101.5	59.1

そして最後に、得点層別の Listening スコアの平均点と Reading スコアの平均点の点数差を、年度

ごとにまとめたのが表6である。

表6 上記各年度の各得点層別 Listening、Reading
の平均点の点数差

	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度
～450	54.3	64.3	62.3	87
449～300	72.4	79.6	86.1	92.7
299～	62.3	54.9	54.4	59.1

表6を見て分かるように、平成23年度から平成26年度までの全ての年度において、「450点未満から300点まで」の中得点層に入る学生のListeningスコアの平均点とReadingスコアの平均点の差が一番大きくなっている。一方で、高得点層と低得点層のListeningスコアの平均点とReadingスコアの平均点の差はほぼ変わらないといえるであろう。

したがって2節で述べた、本稿で前提としている考え方、つまり「英語力は全ての技能がバランス良く成り立って構成されているはずであり、常にバランス良く向上していくはずである。したがってListening力を測定するテストのスコアとReading力を測定するテストのスコアのそれぞれがTotalスコアに占める割合は、学生がどの程度の英語力を持っているか、または学生がどのくらい準備勉強をしたかにかかわらず、どの得点層でもほぼ一定となる」という考え方は正しくなく、(1)の予測が正しいことが示されたといえるだろう。

- (1) a. 英語基礎力がある、またはIPテストに対する準備勉強を常に心がけていると著者が考える学生のListeningスコアとReadingスコアはどちらも伸びるため、そのスコア差は英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生のListeningとReadingスコアの差と同程度になりやすい。
- b. IPテストに対する準備勉強を少しはしている、または勉強をし始めたと考えられる学生の場合、Listeningスコアから伸びる傾向がある。したがってそのような学生のListeningスコアとReadingスコアの差は、英語基礎力がある、またはIPテストに対する準備勉強を常に心がけていると考えられる学生のスコア差より大きくなる。また同様に、英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生のスコア差より大きくなる。

4. 考察

では、なぜ(1)のようなことが起こるのであるのか。一番の理由は、学生たちの勉強法にあるのではないだろうか。「IPテストに対する準備勉強を少しはしている、または勉強をし始めたと考えられる学生」がまず行うことが英単語や成句の学習や暗記であることは容易に予想される。「とりあえず単語さえ覚えておけば」というのは、何から手をつけてよいのか分からない英語学習者がよく口にする言葉である。

英語を耳にしたとき、特に動詞と名詞に当たる単語が浮き上がって聞こえると感じる日本人が多いのではないと思われる。その理由の一つとして挙げられるのは、英語の文章を読むときには、音の高低をつけるだけでなく、文中の動詞と名詞に強勢を置いて読む必要があるからであろう。そして特別な場合を除いて、前置詞や冠詞は強く読まれない。

当然のことではあるが、市販の単語帳では動詞と名詞に多くの紙面が割かれている。したがって覚えた英単語や成句の量が増えれば、Listeningにおいては動詞と名詞が強く読まれるため、話されている内容を予想しやすくなる。つまり語順などを正しく把握していなくても、聞こえた単語、中でも特に動詞と名詞や成句の意味が分かれば、正確ではないかもしれないが、どのような内容なのかについては容易に想像がつく。

しかし、一般的に前置詞が強く読まれることはないため、会話文や長文のListeningの際、特に前置詞や接続詞が多く使われているときなどは、内容把握が難しくなる場合も出てくる。例えば‘I will introduce to you Mr. John Brown (「私はあなたに、ジョン ブラウンさんを紹介します」)’という文章と、‘I will introduce you to Mr. John Brown (「私はあなたを、ジョン ブラウンさんに紹介します」)’という文章では、前置詞toの位置によって内容が異なってくる。

そしてReading問題では、特に後半の問題において、前置詞を含め接続詞や関係詞、that、疑問詞などが多用された長文を読んで、内容を理解しているかを問う問題が出題されている。したがって動詞と名詞をある程度覚えてだけでは、文章全体の内容を把握するのが難しい場合が多くなることはいうまでもない。

また Reading 問題の前半では、単語の使い分けなどが問われることがある。例えば ‘Nancy sang ()’ の () 内に入る適切な語を、‘beauty / beautifully / beautify / beautiful (『美しさ／美しく／美しくする／美しい』)’ の選択肢から選ぶといった問題である。これは、自然な表現をするために、ある文脈で必要とされる適切な語句を選択できるかどうかを問う問題である。英語を母国語とする話者ならば難なく正答を選べるこのような問題に正解できることは、すなわち自然な表現ができることを示せることに繋がる。

「IPテストに対する準備勉強を少しはしている、または勉強を始めたと考えられる学生」の中で、このように「品詞」や「同じ日本語訳を持っている語句の意味や用法の違い」に注意を払う余裕のある者はそう多くないのではないだろうか。

これに対し「英語基礎力がある、または IP テストに対する準備勉強を心がけていると考えられる学生」は、勉強を進める中で、動詞と名詞だけでなく、他の品詞の単語に対しても意識的または無意識のうちに注意を払いながら理解を深めていると考えられる。

そしてその日本語訳を覚えるのはもちろんのこと、「品詞」や「同じ日本語訳を持つ語句の意味や用法の違い」などにも対応できるようになると考えられる。したがって Listening 問題だけでなく、Reading 問題でもある程度の点数を取れるようになるということは容易に想像できる。

5. おわりに

本稿では、小山高専で平成 23 年度から平成 26 年度までに実施された IP テストの試験成績データを使用し、年度ごとに Total スコアを「450 点以上」、「450 点未満から 300 点まで」、「300 点未満」の三層に分けた。

その上で、「450 点以上」の点数を取れると考えられる学生、つまり英語基礎力がある、または IP テストに対する準備勉強を常に心がけていると思われる学生の Listening スコアと Reading スコアの平均点の点数差は、「300 点未満」の点数を取ると予想される学生、つまり英語基礎力がそれほどない、または準備勉強をほとんどしていないと思われる学生の点数差と同じ程度となることが明らかになった。そして「450 点未満から 300 点まで」

の点数を取っている学生、つまり IP テストに対する準備勉強を少しはしている、またはテスト勉強を始めたと考えられる学生の場合の Listening スコアと Reading スコアの平均点の差は、「450 点以上」や「300 点未満」の得点を取っている学生たちの点数差より大きいことが明らかになった。

参考文献・参考資料

- 1) 有坂頭二、山西敏博、岡田晃、有坂夏菜子、杉山桂子、関根健雄 2014. 「GTEC 及び TOEIC-IP の結果に見る、過去 3 年間の小山高専生の平均点と受験者数の推移」 『小山工業高等専門学校研究紀要 第 47 号』, pp.21-30.
- 2) 国際ビジネスコミュニケーション協会 2015. 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2014』
- 3) 国際ビジネスコミュニケーション協会 2014. 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2013』 Available at http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/data/DAA2013.pdf
- 4) 有坂頭二、山西敏博、岡田晃、有坂夏菜子、杉山桂子、関根健雄 p.21-22.

【受理年月日 2016年 9月29日】

